スラム街の歴史と実態

岩本　梨瑚
（小川　賢治ゼミ）

現代社会においては、各国で貧富の差が拡大していることが問題とされている。第二次世界大戦後、多くの国で急激に人口が増加した。その中でも都市部における人口増加は、周辺農村部からの移住者が加わることで尚、人口増加に拍車をかけた。第二次世界大戦前には年率 0.8% の増加率で世界人口は推移していたが、1950 年には 25 億の人口に達したと推定されている。戦後の世界人口はこの 45 年間に優に 2 倍を超え、2025 年には 97 億人に増大している（石南國，p.1）。こうして人口増加率を高めていた開発途上国では、人口 500 万人を越す大都市が形成されていた。

このように急速に形成された大都市では、人口の増加に伴った産業の発展が著しく遅れていることが課題として挙げられる。こうした背景で国連には国連人間居住計画（UN-Habitat）という、都市問題に取り組む先導的な国連システム機関があるが、現状ではあまり改善されていない。

私がこのテーマを選んだ理由は、戦後 80 年が経とうとしている中で、未だ世界では貧困に苦しんで生活している人が大勢いるが、世界ではさらに深化を遂げているこの格差に違和感を抱いたからである。

この論文では、このようなスラム街の問題・実態について述べていく。スラム街の歴史に触れ、我が国と他国で起きている問題・実態を明らかにしていき、どうすれば解決につながるのかを考えていきたい。

第 1 章ではスラム街とはなにかを明らかにし、スラム街ができる要因と社会問題を説明していく。第 2 章では世界の開発途上国、先進国で生じているスラム街の実態、特徴をまとめ、実際に起きていることを紹介していく。第 3 章では我が国におけるスラム街の実態、歴史についての特徴をまとめ、現状を紹介していく。第 4 章では第 3 章までを整理し結論を述べ、実態に関する問題点や今後の展望をあげる。

第 1 章　「スラム街」とはなにか

この章ではスラム街とはなにか、どのように形成されているのかについて明らかにしていく。またスラム街で起きている社会問題についても取り上げていく。

1-1　スラム街とは

スラム街とは生活に安定性を欠く人々が住む地域である。例えば、過度な人口密度があり、公共サービスが受けられないことや衛生状態が良くない地域などが総じてスラム街と呼ばれている（橋本祐子，1983，p.134）。また、国連人間居住計画（UN-Habitat）では、次の 5 つの項目の 1 つでも欠如している世帯のある地域をスラム街と定義している。1. 改善された水へのアクセス、2. 改善された衛生施設へのアクセス、3. 住み続けられる保証、4. 住居の耐久性、5. 十分な生活空間である。

近年多くの国で経済発展が著しく、急激な都市化が進んでいる。国連人口統計によると、世界の都市化率（都市部に住む人口の割合）は、2010 年に 50% に達し、2050 年には 70% にまで上昇すると言われている。そのうち、アジアの都市人口比率が高く、2020 年時点で世界の都市人口のうち 60% 近くを占めている（新田目夏実，2010，p.56）。国連人間居住計画では途上国における経済成長に伴い、貧困層が集中する都市でインフラ整備が整っている地域も存在するが、一方で人口過密やインフラ不足で不適切な住環境が課題となっている地域が数多く存在していることが指摘されている（中西翼，2020，p.47）。

1-2　スラム街が生まれる要因、社会問題について

スラム街が生まれる要因として 3 点挙げられると考える。

1 点目は、土地所有の問題である。ほとんどの

スラム住民は土地を所有していない。短期の契約で地主から土地を借りたり、公有地や個人の所有地を不法に占拠したりしていることが挙げられる。しかし、スラム住民が現在の居住地に住み続けることができる保証はなく、いつ政府から立ち退きを命じられるかわからないという不安定な状態にある。このことはスラムという地域社会に不安をもたらす反面、居住確保のために政府に対しての運動で結束を強めることもある。そしてスラム住民はコミュニティ意識が強く、助け合って現在を生きている人々が数多く存在している。土地所有の問題は伝統的な制度や何世紀も前からの大地主の意向がからむため、対策が非常に難しいという問題点が挙げられる。各都市の政府機関は土地所有の問題の重要性を認めているが、具体的な対策については、実施が思うように進んでいない都市が大半を占めている状況である。

2点目は、居住環境の問題である。これは1点目で述べた土地所有の問題とも関連する。前述のような土地所有形態をとるスラムは、都市内でも環境の悪い低地や湿地帯に立地することが多い。農村部から都市部への大量の人口流入によって過密度は高くなる。そのため、もともと住宅地区ではなかった地区では、水道、下水、電気等のインフラが整備されていない。また無計画に住宅が建設されているため、道路が狭い。これらの環境は生活状況の劣悪さとなって現れた結果、スラム街と呼ばれる要因となる。

3点目は、職業と収入の社会経済面の問題である。スラム街に住む多くの住民は、不安定な雇用と不安定な収入システムの下にある。スラム街住民の職業としてあげられるのは、露天商やタクシーの運転手、日雇労働者が多い。しかもその雇用形態は自営や個人による雇用のため、失業のリスクが大変高くなっている。そのため子どもが学校をやめて労働しているケースがほとんどであることが課題として考えられる（橋本祐子，1983，p.133-136）。

1-3　第1章まとめ

第1章では、スラム街が生まれる要因、問題についてまとめて紹介した。第二次世界大戦後の人口増加に伴い、開発途上国を中心に十分な都市化が形成されていない地域がスラム街へと発展していった。先進国における都市化の古典的なパターンは、都市的性質が形成される狭義の都市化の段階から「郊外の都市化」＝大都市圏の形成を経て、次第に中心都市の衰退＝逆都市化にたどり着くと定義されている。一方で開発途上国の都市化はこの定義と異なり、産業化なき都市化へと発展している。工業地帯で必要な人口を遥かに超える人口が都市部に流入しているため、過密都市になっていく。そして農村部からの人口流入で労働における適応性を住民がまだ取得していないことから、産業化において需要と供給がアンバランスになっている。この流れから住宅問題、環境問題の課題が沢山溢れていると考えられる（山田昌子，2000，p.2）。

第2章　世界におけるスラム街について

この章では、開発途上国におけるスラム街と先進国におけるスラム街を紹介していく。

2-1　開発途上国におけるスラム街の実態

開発途上国のスラム街として2つの国を紹介していく。

1つ目の国は、タイである。1940年代からタイの首都バンコクにおいて徐々にスラム街が形成されるようになっていったが、本格的なスラム街が形成されるようになったのは1960年代初頭に入ってからである。要因は、工業化政策が本格化し軌道に乗り始めたことであると言われている。工業化政策によって都市部では安価な労働力を大量に必要とした。その結果、職を求めて多くの地方住民が都市部に流入した。しかし、住宅問題に対策を講じず、政府は見てみぬふりをした為に、地方から流入してきた労働者は、地価の高騰した土地を持つことが出来ずに空き家や不法住宅に住むようになった。教育のレベルが低い地方の住民は低賃金の単純労働に就くことしかできないが、それでも農業をするよりも収入がずっと良かったため、都市部への人口流入は止まらなかった（山田昌子，2000，p.3）。

現在のタイ国内には2,000箇所以上のスラム街があると言われている。その多くがバンコクとそ

の周辺に集まっており、タイの人口の10%が住むバンコクだけでも1,800箇所のスラムが存在している。こうした中で、政府の方針によりバンコクに住む多くの住民が立ち退きを強いられている。1980年代後半になると、タイの経済発展により都市下層民の就業機会が増えてくるとともに、都市部では地価上昇と都市開発の圧力の増大から、スラムの撤去や移転の圧力がより一層高まった。そして、スラム街住民をバンコク郊外の公共住宅に移転する計画が出される。ところが、スラム街住民の職業は、露天商や車やバイク、トゥクトゥクなどの運転手、自営業主であることから職住近接の傾向が強い。一度、都市部を離れたとしても戻ってくる住民が多いため対策は困難を極めている。

2つ目の国は、インドである。アジアで最大のスラム街と言われているのはインド・マハラシュトラ州にあるムンバイの中心から車で40分のところに位置しているダラヴィである。先述のスラム街とは違い、この市は2.16平方キロメートルに60万人から80万人の住民が住んでいると言われ、この住民の4割はスラム街に住んでいる。

ダラヴィは19世紀後半から漁業を行うコリ族という先住民が暮らしており、彼らがゴミやヤシの葉を用いて埋め立てたことで現在のダラヴィが存在している。その後、数多くの人々がダラヴィに移住し、繊維産業で生計を立てていた。次第にインド全国から職を探しに移住してきたことで廃棄物が集まるようになった。そこで徐々にインド全域のリサイクル産業における重要な役割を担うことになる。また、革製品産業も盛んで、インド革産業はヨーロッパ市場等を供給先とする高価な革製品の輸出をしており、近年は工場の大規模化が進んでいる。従来のスラム街とは違い、ユニークな地域である（久保田和之，2022，p.2）。スラム街と同様、生活環境は劣悪であるが、他のスラムとは違い、学校や病院が建てられており、物乞いや行き倒れを見かけることはない。この街ではリサイクルできないものを見つけるのは不可能と言えるほど、廃棄物を使い切る仕組みが形成されている。ダラヴィでは職業上の役割があり、廃棄物を運ぶ者や選別する者、粉砕する者などの沢山の事業者が存在している。ダラヴィに住む住民は3畳ほどの広さのスペースに4～5人の家族が居住しているが、テレビやエアコンが完備されている家庭もある。ムンバイでは公共の電気供給に加えて、民間でも電気供給が行われており、スラム地区でも手軽に電気を利用することができる。他のスラムとは違い、インフラが整っていることから犯罪発生率は低く、住民たちで助け合って生活をしている。

2-2　先進国におけるスラム街の実態

先進国のスラム街として紹介するのはアメリカである。スラム街と呼ばれる地区の1つは、米ペンシルベニア州フィラデルフィア市ケンジントン地区である。この地区は住民間でゾンビランドと呼ばれており、全米で最も純度の高いヘロインが1袋5ドル（約700円）で売買されている。長さ約800mの線路沿いには多くの薬物中毒者が存在している。ケンジントン地区は1950年代に脱工業化現象が起き、ブルーカラーの工業地帯から麻薬が蔓延したことが、市からの援助が途絶えたことで尚、薬物が蔓延している。失業や生活困窮、鬱から逃れるために多くの人が薬物を求め、ケンジントン地区に移住してくる。同地区の警察署によると、現在のケンジントン地区では薬物を入手できる場所が80箇所以上存在すると言われている。2020年には推定47人が薬物摂取で死亡しているという結果が得られている。2021年には殺人事件が563件あり、1日で1.5人の人が死亡していることになる。こうした不法な薬物を体内に入れることで身体が言うことを聞かなくなり、正常な立ち方ができないことからゾンビランドと呼ばれている。

アメリカにおける貧困層増大の要因はアメリカ人に根強くある「自己責任論」や「極端な資本主義社会」、「加速し続けるグローバリーゼーション」があげられる。アメリカの慈善団体であるFeeding Americaによると2019年時点のアメリカでは3,800万人もの人が貧困状態にあるとされ、8人に1人が貧困層にあたると言われている（公務員総研サイト）。

2-3　第2章まとめ

第2章では、開発途上国と先進国のスラム街の歴史、実態を紹介した。第1章で明らかにしたス

ラム街になる定義に当てはまる地区もあれば、スラム街でもインフラが整っており、貧しい環境でも生活ができている地区も存在する。開発途上国におけるスラム街の形成の基盤は、人口増加に伴う都市化の形成がまだなされていないことが第1としてあげられる。職に就いて生活をしている人が大半だが、アルコールや薬物依存の課題が重要である。先進国では、年々貧富の差が拡大していることが原因でスラム街が形成されていることがわかる。自由主義国家において自己責任を強調するアメリカでは1度社会から離れてしまうと戻ることは困難を極めている。3つの国を紹介したが、一概にスラム街がどのように形成されるのかは言えない。開発途上国におけるスラム街は、似たような課題が掲げられており、対策が尚必要である。また先進国におけるスラム街は、貧困層から作られているため、国全体が失業者に何らかの仕事を与えない限り改善は難しいだろう。

第３章　日本におけるスラム街について

3-1　第二次世界大戦後におけるスラム街の実態

日本に関して、第二次世界大戦後におけるスラム街の実態として大阪と広島を紹介する。

大阪は戦前、明治45（1912）年実施の細民調査統計によりスラム街への着目が高まった。日本橋、今宮、難波の各派出所エリアが細民の密集する地区としてみなされていた。

このエリアは、江戸期に被差別部落が立地し、明治時代末期ごろまで下層社会の受け皿となっていた（水内俊雄，2003，p.35）。当時、細民街・スラム街と呼ばれたエリアは、一般的に都市内被差別集落・日雇労働者地区・都市雑業層集住地区として分類され、大都市のインナーリング（環状線沿い）に存在した。1920年代中ごろから、近隣地区にある零細工場地区（東部地域）に、植民地化された朝鮮半島出身者が移住して、民族的な居住文化を伴いつつ、その集住場所もインナーリングに付け加えられていった。

昭和20年の3月と6月の爆撃による大火によって、戦前のスラム街の大部分も焼失した。不良住宅が特に集中する南部の日本橋、西成方面、西部の西九条方面、東部の鶴橋方面はほぼ全焼となり被害を受けた。西成区東一帯のスラム街「釜ヶ崎」は戦前、犯罪の街として有名だった。だが、商店が計画され、一戸43,000円で（現価値130～150万円）住宅が建設されスラム街の名残は見られなくなっていった。しかし、戦災の影響で土地所有の混乱等で無法居住が生じたため、スラム問題が解決に至るのは難しくなっている（水内俊雄，2004，p.30）。

大阪駅前では浮浪者や野宿者が戦後の著しい特徴として大量に現れた。家を持たない最低水準の居住スタイルであり、大阪駅、鶴橋、あべの、難波などに浮浪者がたくさん存在していた。昭和22年10月1日に行われた臨時国勢調査では、市内に住んでいた浮浪者が427名おり、北区では6割以上の259名、南区が残りを占めていた。昭和25年には浮浪原因の34%が戦災であったのに対して、昭和28年にはそれがゼロになった（水内俊雄，2003，p.36）。

第二次世界大戦が終わり、各都市では闇市という市場が出現するようになる。闇市は昭和20年9月ごろから存在していたと言われている。駅前の空地（強制疎開、焼跡）の無断使用、不法占拠を常套手段として、最大級が鶴橋で500～600人、あべの、天王寺駅前の闇市もこれに匹敵する規模と言われ、天王寺公園にも200～300人、天神橋筋では400～500人等で急激に闇市が形成されていった。闇市では、農村や漁村から持ち込まれた食料又は、アメリカ軍から横流されたチョコレートやタバコ、その他生活雑貨が売られていた。立退きを要求すると立退料を闇商人から請求されることもあり、実力沙汰で暴行脅迫を行うこともあった。ひどいものでは、他人の土地に無断で建物を建てておきながら高い値段で他人に譲ることもあった（水内俊雄，2004，p.31）。

次に広島の戦後スラムを紹介していく。

被爆都市の広島市においても闇市が市内各所に出現しており、広島駅前には大規模な闇市が形成され賑わった。広島全域が被爆で市街地の大半は廃墟となったが、闇市では商売が営まれ、多くの顧客を集めていた。これらは被爆した広島市の活性化に大きな役割を果たし、復興過程を語るうえで、大切な存在であった（李・石，2008，p.1395）。

広島市の中心部、原爆ドームの北、相生橋から

空鞘橋を経て三篠橋に至る太田川の左岸の、約1.5kmの土手筋の道は、かつて「相生通り」と呼ばれていた。この道は、昭和20（1945）年の被爆後から昭和50（1975）年ごろにかけて、1,000戸ほどの密集するスラム街があった。この地区が通称「原爆スラム」と呼ばれた地区である（仙山希望，2016，p.125）。原爆スラムが発生した要因は2点ある。1点目は、原爆投下による都市の壊滅である。広島は一瞬にして全域が廃墟となり、生死をさまよった市民が雨風を凌ぐ場所としてスラム街が発生したものである。河川敷の方は爆心地に最も近く、最後まで残った市内最大の不良住宅地区であった。2点目は、戦後の社会問題、住宅問題の集積したエリアの象徴であったからである。敗戦後、復興事業による、他所からの立ち退きや貧困差別といった経済的社会的弱者の集積した街となった。そして戦後の長い復興の過程に置き去りにされ、経済的恩恵を受けなかったものが住む街として存在していた。しかし、相生通に居住している住民は、劣悪な環境ながらも永住したいと回答する割合が半数を超えるほど、コミュニティ意識が強かった（仙山希望，p.133-134）。

3-2　現状におけるスラム街の実態

日本の現状におけるスラム街としてあいりん地区を紹介する。

ここは大阪市西成区北部のJR西日本新今宮駅の南側一帯の地区の愛称で、昔の地名で「釜ヶ崎」と呼ばれる地区である。この地区は高度成長期以降、日雇労働者が仕事を求めて集まる日本最大の寄せ場である。この地区では住所不定のものも多く、三角公園ではブルーシートで作られた家に住むものや路上に力尽きて倒れているものもいる。あいりん地区の宿代は現在でも1泊800円と格安で、逃亡中の犯罪者が身を隠すのに最適な場所とも言われている。この地区は、失業者やアルコール依存者が集まる場所で2008年には暴動が起きた。ところが、10年近く前からバックパッカーなど外国人観光客が安宿で泊まる機会が増えたため、以前より安全な方向に向かっている。地域的にも新世界（天王寺動物園）にも近いことから安く飲めるグルメ界として栄えている。現在の宿では、某ホテル予約会社から予約することが可能になり、スラム街というより、治安が周りの都市より悪いところとして注目を浴びている。

3-3　第３章まとめ

この章では日本におけるスラムの歴史、現状について紹介した。スラム街として認知されたのは明治頃からで、この頃は細民地区として調査されていた。第二次世界大戦後は、多くの地域が空襲により焼け野原となったため闇市と呼ばれる場所が存在した。先述紹介した広島の現状は、完全に復興しており、観光客を多く引き寄せている。完全に復興した過程は高度経済成長による日本の経済問題が大きく絡んでいることがわかる。

第４章子どもの貧困について

4-1　子どもの貧困問題

スラム街での子どもの貧困が問題視されている。国連総会では、1989年に世界中全ての子どもたちが持つ人権を守るため「子どもの権利条約」が国連総会において採択され、この条約を守ることを約束している国・地域の数は196もあり、世界で最も広く受け入れられている（内田塔子，2012，p.39）。またこの条約32条では、子どもが経済的な搾取から保護されることを規定しており、健康、発達、教育に有害な労働をしなくて良い権利を持つことが認められている。しかし現実では、開発途上国のスラム街では数億人の児童が働き、10歳から14歳の子どもは1億9,000万人と推定され、その4人に3人が週6日以上働き、1日9時間以上も働いていると言われている。そして世界で最も多くの児童労働を抱える国はインドであると推定されている（草野昭一，1989，p.27-28）。女の子はお金で身売りされることも多々ある。そして、2021年時点で、貧困国に生まれた子どもたちのうち1年で500万人近くの5歳児未満が死亡しており、原因は肺炎や設備がままならない衛生状態（トイレ）による下痢等である。こうした貧困国での栄養・発育不良は子どもの死亡率に大きな影響を及ぼしている。ユニセフでは子どもの貧困を無くすために、安全な飲料水や衛生用品の提供を行っているが現状は解決へとまだ繋がっていない。

4-2　まとめ

4-1 ではスラム街・貧困地域での子どもの貧困問題や栄養状態を取り上げた。私たちの暮らしの中では下痢で亡くなるのは聞いたことはないが、アジアやアフリカ地域では実際に起こっていることを知って自分たちが何をできるかについて考えさせられる。ユニセフでは、支援募金活動を行なっており、ネットやコンビニエンスストア等で少額から寄付できる。児童労働をしているのが原因で、字が書けず、読むこともできない子どもたちが何億人といる現状を知り、この論文を通じて少しでも多くの人に現状を伝えることができることを願う。

第５章　結論をまとめ、それから何が言えるか考える

5-1　まとめ

第１章ではスラム街が生まれる要因について説明した。スラム街とは生活に安定性を欠く人々が住んでいる地域であり、過度な人口密度、公共サービスの欠如や不良な衛生状態の地域などが総じてスラム街と呼ばれている。第二次世界大戦後の爆発的な人口増加に伴い、多くの国では大都市形成がうまく行えていないことが大きな要因である。

第２章では世界で生じているスラム街の歴史、実態を３つの国を題材として取り上げた。タイでは第１章で説明したスラム街が生じる要因に全て当てはまっている。だが、インドでは一風違ったスラム街の特徴である。このスラム街が生じる要因として定義されているものに多くの開発途上国は当てはまるが、コミュニティ意識が強い国では自分たちで助け合いながら生活していることがわかる。そして先進国のアメリカでも現状としてスラム街が生じていることから、開発途上国でしか起こらないという発想は無くなるのではないだろうか。第３章では日本におけるスラム街の歴史、実態を紹介した。多くの都市では第二次世界大戦の影響でスラム街と呼ばれる地区が存在した。闇市が形成されたが、住民は生きるために必要なものが多く売られていたので必要不可欠であったのではないかと考える。

高度経済成長により多くの都市ではスラム街がなくなったが、現状で存在している都市もある。そのため、世界だけに目を向けるのではなく、日本の現状も理解することが必要であると感じた。第４章では、子どもの貧困問題を取り上げた。スラム街に生まれた子供たちが児童労働や身売りをされている点で、「子どもの権利条約」はあるものの、うまく利用できていないことがわかる。

5-2　終わりに

AI や最先端技術がある現在だが、一向にスラム街はなくならず、貧富の差が拡大していることが数十年にわたって課題とされている。開発途上国におけるスラム街は、インフラを通すことや、マンションのように一戸に何世帯も住めるようにしていくことがスラム街解決につながるのではないだろうか。また、避妊の技術や教育の場面を広げていくことで次世代の人たちがより良い環境で育つことが可能になると考える。貧困家庭に育ち、学がないままだと現状を変えることは非常に難しい。そして、アルコールや薬物依存になってしまうと自力で治すことは困難であることから、国の補助がもっと必要であると考える。戦後に比べ、スラム街は減っているが貧しい思いをしているひとがたくさんいることをこの論文を通じて伝えたい。

参考文献

新田目夏実，2010，アジア都市の現在　グローバル化と都市経済，コミュニティ，文化の変容，日本都市社会学会年報 第 28 号

石南國，2001，第２次世界大戦後の世界人口，城西大学大学院研究年報 第 17 号

内田塔子，2012，ユニセフ「子どもにやさしいまち」作りの社会的背景とその特質，ライフデザイン学研究 第８号

草野昭一，1989，発展途上国における児童労働，奈良県立商科大学「研究季報」第９巻 第２号

久保田和之，2022，現代インド・ムンバイの革製品産業　スラム工房ネットワークを通じたイノベーション，京都大学

仙山希望，2016，「平和都市」の「原爆スラム」戦後広島復興期における相生通りの生成と消滅に着目して，日本都市社会学会年報 第 34 号

中西翼，2020，貧困地区におけるコミュニティ維持型居住について，KGPS Review: Kwansei Gakuin Policy Studies Review 第 27 号
橋本祐子，1983，東南アジア大都市のスラム改善政策とその問題点，社会科学ジャーナル（国際基督教大学）第 21 号
橋本祐子，2021，アジア都市の変動と都市下層タイのスラムにおけるコミュニティ開発の 40 年，社会科学ジャーナル（国際基督教大学）第 39 号
水内俊雄，2003，近代期大阪の空間構造と居住文化，都市文化研究．2 巻
水内俊雄，2004，スラムの形成とクリアランスからみた大阪市の戦前・戦後，立命館大学人文科学研究所報 第 83 巻
山田昌子，2000，バンコクにおけるスラム化と過剰都市化論の因果関係と打開策，立命館大学
李明・石丸紀興，2008，戦後広島駅前ヤミ市の出現とその変遷過程，日本建築学会計画論文集 第 628 号
AFP 記者コラム，2017，米ノースフィラデルフィア［ヘロイン・キャンプの地獄］，https://www.afpbb.com/articles/-/3140426
公務員総研，2020，アメリカの貧困問題の原因やその実態，https://koumu.in/articles/200316c
貧困問題研究所，2023，ワープア太郎の世界と日本の超格差，https://kinyu1.com/post4181/
BAZOOKA!!，2022，［聞く人間を間違えていたら殺されていた］薬物中毒者の街 7・ゾンビタウンでの取材中に犯したタブーとは，https://www.bbc.com/japanese/features-and-analysis-40933097